

令和5年度  
荒川区総合教育会議会議録

荒川区総合教育会議

## 令和5年度荒川区総合教育会議

1 日 時 令和6年3月22日 午後1時30分から午後2時30分まで

2 開催方法 オンライン会議

3 出席者 (構成員)

荒川区長	西川太一郎
荒川区教育委員会教育長	高梨博和
荒川区教育委員会教育長職務代理者	坂田一郎
荒川区教育委員会委員	小林敦子
荒川区教育委員会委員	繁田雅弘
荒川区教育委員会委員	長島啓記

(関係職員)

総務企画部長	小林直彦
総務企画課長	中野猛
教育部長	三枝直樹
教育委員会事務局参事	的場寛
教育総務課長	山形実
教育施設計画担当課長	田中欣也
学務課長	佐藤彰洋
指導室長	津野澄人
教育センター所長	杉山茂

4 協議事項 荒川区における英語教育について

### ○総務企画課長

本日はお忙しい中、令和5年度荒川区総合教育会議にご出席いただきましてありがとうございます。

本日の会議につきましては、オンライン会議形式で行わせていただいております。早速ですが、本会議の主宰者でございます西川区長より、ご挨拶をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

### ○西川区長

本日は、会議にご出席をいただき誠にありがとうございます。教育委員の皆様におかれましては、日頃から荒川区の教育行政につきまして、深いご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

本日の総合教育会議は「荒川区における英語教育」をテーマに、幅広いご見識をお持ちの教育委員の先生方からご意見を賜りたいと存じます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

### ○総務企画課長

議事に入らせていただく前に確認させていただきます。本日の議事録署名人につきましては、高梨教育長と、坂田教育長職務代理者とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。なお、本日の会議の議事録につきましては、皆様にご確認いただき、署名人にご署名いただいた後、区ホームページに掲載する予定でございますので、ご承知おきください。

それでは、本日のテーマに関し、ご意見をいただければと存じます。坂田委員、小林委員、繁田委員、長島委員、高梨教育長の順でお願いいたします。初めに、坂田委員お願いいたします。

### ○坂田委員

日本社会でも、英語を聞く、話す、書く、読むの「4技能」をバランス良く総合的に育成することが重要視されるようになってしばらく経ちます。

その能力を測定する基準として、CEFR（セファール）という基準が活用され、大学入試でも、英検、ケンブリッジ英語検定、GTEC（ジーテック）といった外部テストの導入が進んできています。

一方で、全国的に指摘されている英語教育の課題としては、学年が上がるに従っ

て英語の学びが楽しいと考えて高い学習意欲を維持できる子どもの割合が減ってしまうこと、教える側でも、まだ教員全員が英検準一級以上の英語能力を持つ体制にはなっていないこと、小学校と中学校が連携したカリキュラム立案に取り組んでいる現場の比率が低い、などといったことが指摘されています。

国際的な英語能力指数である「EF EPI」でみると、最新の2023年の調査では、日本は、世界113カ国中87位であり、アジアの中でも23カ国中15位にとどまっています。

以上のようなことを踏まえると、英語の「4技能」の学びを掲げたものの、現時点では、日本社会がそれへと十分に移行できていないと考えておく必要があると思います。

東京大学では理系を中心に大学院の英語化はある程度進んでいますが、学部に関しては、まだこれからという段階です。先日、新聞やメディアでCollege of Designの創設が報道されましたが、これは学部の一部に留学生とともにすべて英語で学ぶスクールを開設しようとする構想です。この構想が実現するのは、早くて2027年になります。

このような状況下で、今の子どもたちが社会の中心となる10年後、20年後には、日本社会も否応が無しに、グローバル化が進むものと予想されます。子どもたちが多様なキャリアを自ら選び取ることができるようにするためには、英語力や英語の運用能力の向上が欠かせないと考えられます。

これまで、コンピューテーショナルな言語処理（自然言語処理）の学術研究の中では、自動翻訳が主要分野の一つとなってきました。音声認識技術の進化もあって、現在、自動翻訳が実用化の域に入ってきています。それを使えばよいのではないかとの意見もあるかもしれませんが、真に人間的なコミュニケーションをし、信頼関係の輪の中に入るためには、やはり、個々人の英語能力は欠かせないと考えます。

荒川区では、先駆的に小学校からの英語の学びの充実や4技能型の能力育成に取り組んできました。タブレット型パソコンの導入と同様に、少なくとも、全国平均から3年から5年早く、社会の変化や子どもたちの将来のあるべき姿を捉えて、先駆的に取り組んできたものと考えられます。

このような先駆的な取組を活かしていく上で、大事なこととして、2点申し上げます。

一つ目は、小学校と中学校の教育の接続を一層、密にすることです。小学校では、話す、聞くを重視した学びが既に行われてきています。その流れを止めることなく、

子どもたちを中学校での学びへと導くことについて、課題を点検し、更に工夫をすることが必要と考えます。

例えば、話したり、書いたりする際に、英語の文法が完璧でないといけないという考えは、英語の習熟にとって大きな制約となります。英語試験の一つである GTEC は、単語の羅列ではなく、なるべく文章で表現する習慣を付けるようにすることを指摘していますが、完璧にこだわらない、完璧でなくても恥ずかしくないという意識付けが大事だと考えます。子どもたちは、小学校では恥ずかしいと思わず、自由に英語を使っても、どうしても学年・年齢が上がると、恥ずかしいという気持ちが前に出てくものです。中学校では、そのようなことを恥ずかしいと思わずにどんどん発言することを教育として進める必要があると考えます。

二つ目は、ダイバーシティ（多様性）と英語教育との融合です。「多様性」とは、いっても、多様な個々人をつなぐ共通の手段がなければ、それは成り立ちません。

「英語」と「算数・数学」は、多様な個々人を横につなぐ基幹的な手段だと考えられます。今の子ども達は、これらに「プログラム言語」が加わると思います。

いずれにしても、いろいろな人たちと交流するために、又は共同作業をして手助けをするためには、英語を使う機会を増やしていくことは、多様性と英語双方の学びにプラスとなります。その際に、英語では、日本語よりもジェスチャー・ボディランゲージが大事だと思います。

ハーバードビジネスレビューの論文にありますが、自分の起業プランのプレゼンテーションをベンチャーキャピタルに対してする際に、言葉よりもむしろボディランゲージや顔の表情といったものの方が大事であり、成果につながるという研究成果もあるぐらいです。

交流をすることで、そうしたジェスチャー、日本人には過剰に見えるかもしれないくらいの身体表現を自然に学んでいくことも、英語の4技能と組み合わせさせて、子どもたちの英語の能力、活用能力を高めることに貢献すると思います。以上です。

## ○総務企画課長

ありがとうございました。続きまして、小林委員お願いいたします。

## ○小林委員

小学校・中学校の英語教育に関して、まず、私が所属している早稲田大学と、アメリカのイリノイ大学、韓国の高麗大学との交流事業を毎年やっており、その中で、

昨年12月1日に尾久八幡中学校と第四峡田小学校を訪問させていただきました。

イリノイ大学のアリソン先生という、外国人に英語を教える第二言語教育の世界的に有名な先生から、荒川区の英語教育は非常に素晴らしいと褒めてもらえました。また、早稲田大学のポッペ先生も同行され、小学校で校長先生が実際に英語を使いながら小学校の説明をしてくださり、大変に褒めておられました。このような方々からお褒めの言葉を頂戴し、これまでの荒川区の英語教育は、非常に高く評価できるものだと思えました。子どもたちとの交流では、高麗大学の院生に小学生が積極的に英語で声をかけており、彼らも本当に喜んでいました。

このような交流から、英語というのは、改めて世界言語であり、英語を話すことでこれだけ世界が広がるということを確認させられました。

英語教育に関して、教育の方向性ということ考えた時に、私としては、2つの方向性が非常に重要なのではないかと考えています。

1つ目は、全体としての英語のレベルを上げるということです。これは、日常的な授業での英語教育の向上ということが非常に重要だと思います。

2つ目は、特に、英語に興味関心を持っている児童生徒の意欲を伸ばす活動が非常に重要なのではないかと考えています。具体的には、荒川区ではワールドスクールという活動で取り組んでおり、そうした活動が非常に重要だと思います。この両方から英語教育に取り組んでいく必要があるのではないかと考えています。

荒川区のワールドスクールについては、私も視察をしましたが、最終日にグランドフィナーレということで、子どもたちが自分たちで作った寸劇を英語で披露するというものがあり、小学生ながら非常に興味深いスキットを作っており、上演後の小学生の表情が素晴らしく晴れやかで、英語を楽しんでいるということが伝わってくるものでした。また、中学校で、国際教養大学でのイングリッシュビレッジへの参加というものがあり、これも参加したことがあります。この内容も極めて素晴らしい内容であると思っています。

このようなワールドスクールを考えてみますと、非常に素晴らしい点があると思います。1点目は、周囲の環境が全て英語であり、日本語を話さず全て英語でやるということが非常に重要だと思います。小学校、中学校のワールドスクールを見せてもらいましたが、特徴的なこととして、失敗を恐れずにチャレンジする気持ちを起こさせていること、自信を持って英語を話すようにさせていることがあります。先ほど坂田委員のお話にもありましたが、どうしても日本人だと完璧でなくてはならないという思いがあるのですが、とにかく表現をしてみるということが重要だという自

信をつけてくれるような取り組みだと思っています。このワールドスクールについては、参加した生徒の自己肯定感が非常に高まっていると先生方も評価されており、この点は特筆すべきなのではないかと思えます。また、英語教育においては、宿泊型の研修、英語漬けにするイマージョン式の英語教育は効果が高いと思っています。

これらを踏まえた上で、英語教育における提言として、1つ目は、全体として英語の水準の向上を図ることが重要だと思えます。その上では、東京グローバルゲートウェイの訪問を事業化するといった取組が大事だと思えます。

2つ目は、興味関心を持つ児童・生徒の意欲を伸ばす活動も重要だと思っており、これまで荒川区が取り組んできたワールドスクール、イマージョン式の英語教育は、学校教育の成果を補完する授業としてとても重要だと思っています。これについては、ぜひ継続してほしいと思っていますのでよろしくお願いします。

3つ目は、英語教育の核となる教員の研修が重要なのではないのでしょうか。教員研修についても、いろいろな形で行われていると思えますが、それがバラバラにされてしまうと必ずしも効果があるものではなくなってしまうので、体系性のある研修が重要だと思っています。これは、英語教育における外部評価の中でも玉川大学の工藤先生が提言されていることですが、体系性のある研修は非常に重要だと思っています。また、研修に参加した教員が学びのポートフォリオということで、研修体験を蓄積していくことも研修に対する動機付け、また、英語教育に取り組む動機づけとしても良いアイディアなのではないかと思っています。以上です。

## ○総務企画課長

ありがとうございました。続きまして、繁田委員お願いいたします。

## ○繁田委員

英語の4つの技能の中で、日本の今までの課題というと、話す、聞くというところだと思います。私が以前留学していた時に、英語の勉強で、話すことに関しては苦勞して勉強しなくてはならない状況でした。実際にある程度英語が話せるようになってくると、意外に欧米人の方の議論というのは単純であり、日本人が日本語で行っている思考や議論の方がはるかに複雑で、ある意味高度な議論をしているということを知り、自身を取り戻した経験があります。そういった経験から、4つの英語の技能の中で、聞く、話すが重視されてきている昨今の教育は非常に有効であり、

子どもたちの国際的な活躍に繋がると思います。

荒川区は、平成15年に荒川区小学校英語科指導指針を策定し、教育課程に英語科を設置されました。令和2年に英語科年間指導計画を作り、それを基に荒川区小学校英語科LESSONプランを作成されます。先日、英語の授業を視察した時に、他の授業では静かに集中して授業に取り組んでいた生徒が、英語の授業になると元気で明るく快活に発言をしているところが印象的でした。言語が変わることで振る舞いも変わっており、英語を話すだけでなく恐らく英語が持っている文化を吸収していたのだらうと思いました。それができるのは高校生よりは中学生、中学生よりは小学生なのではないかと思います。小学生の適応力や柔軟性を改めて実感しました。

英語の構文や文法というよりは、むしろ英語の話すスピード感やイントネーション、場合によってはメロディーのようなものさえも小学生が体で吸収しているところが大変印象深く、これを学んでいくことが子どもたちの将来の国際的な活躍に繋がるのだらうと思います。そのことは、平成16年からの小学校のワールドスクール、平成28年から秋田市での中学校のワールドスクールにつながっているのだらうと思います。このことに関し、荒川区の教育関係の方々の努力もあり、参加者の達成目標も達成しているということは大変喜ばしいことと思います。

さらに、荒川区学校教育ビジョンの中長期目標である「未来を開きたくましく生きる子どもを育成する」の目標の一つである、「多様性を尊重し豊かな感性と想像力を育む」という方向性の中で、外国人留学生との交流や海外協力隊経験者との交流にもつながり、大きな成果を上げていると思います。

最後に、次期学びの推進プランの推進目標にある「英語教育における小・中学校の円滑な接続を推進する」においては、小・中学校の先生方同士が十分に連携することが挙げられていますが、その評価はなかなか難しいところがあるのだらうと思います。もちろん、荒川区としては、合同研修の実施実績などを記録に残して評価する努力をしていますが、連携の評価は、実際に教育現場にどのような効果をもたらしているのかということをも、もし評価できれば、本当に素晴らしいことだと思います。なかなか難しいところではありますが、ぜひそのような点にも取り組んでいただければと思います。そうしたことが更なる小中学校の英語教育の効果を高めることにつながると思います。以上です。

## ○総務企画課長

ありがとうございました。続きまして、長島委員よろしくお願ひいたします。

## ○長島委員

小学校での英語教育について、国際理解あるいは異文化理解に関すること、諸外国の英語教育・外国語教育に関することを含めて述べさせていただきます。

小学校での英語教育は、日本では、平成10年に告示された学習指導要領において、総合的な学習の時間の中で、国際理解に関する学習の一環として、外国語会話等の学習という形で始まりました。総合的な学習の時間で国際理解について学ぶということで、地域に住んでいる外国の方からその国の料理や習慣について学ぶといったことが盛んに行われたように記憶しています。それからおよそ10年経って、平成20年に告示された学習指導要領で、第5、6学年に外国語活動が導入され、更に平成29年に告示された現行の学習指導要領で外国語活動が第3、4学年になり、第5、6学年は外国語科ということになりました。

荒川区では、平成9年度から総合的な学習の時間などで英語に触れたり外国文化に親しんだりといったことが行われてきたようですが、平成16年度から第1学年から全学年での英語教育が開始されました。時期的にも早く、第1学年からということも先行しています。小学校の英語科指導指針は令和5年3月に改訂されていますが、目標は学習指導要領に即して、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質能力を育成することとされています。そこでは、外国の言葉や文化に幅広く興味関心を持ち、それらの共通点や相違点に気づき、互いを尊重する態度を育成していくことや英語を使って様々な国の人たちと交流し、体験的かつ実感を持って外国の言葉や文化への興味関心を深めるといったことが示されています。英語を聞き取れる、話せることは必要なことですが、ただ聞き取れる、話せるだけではなくて、聞き取ったり話したりする相手の背景にある生活や文化について興味関心を持って理解しようとするのが重要だと思います。英語そのもの、また、英語の指導教員の方が異なる文化であり、それに親しみ、理解を深めてもらいたいと思っています。異なる言語や国文化について知ることで、これまでとは違った観点から物事を見たり考えたりすることが可能となります。国際理解あるいは異文化理解に関する学習というのは、英語以外の教科でも行われています。他の国の言語や文化を知ることで、自分や自分の属する地域や国、文化がどのような違いや共通点があるかということに気づくことで、自分た

ちの位置づけも明確になっていくのではないかと思います。

次に、これまで外国の教育について調べることを行ってきたので、諸外国の英語教育、外国語教育について少し触れさせていただきます。

荒川区では小学校の第1学年から英語教育が行われていますが、諸外国ではどうなっているのかということです。例えばヨーロッパ各国を見ると、英語を母語としない国では、第1学年あるいは第3学年から英語の学習が行われています。日本と同じだと思われるかもしれませんが、中学校くらいから第二外国語が始まる国があったり、さらに学年が上がると一部の生徒はラテン語やギリシャ語を学んだりもします。その背景としては、言語の系統が近いということや、歴史的文化的伝統ということがあります。また、韓国では1980年代から小学校での英語教育が一部で導入され、1997年度からは小学校第3学年から必修化ということになりました。日本に比べるとかなり早くから実施されており、成果も上がっています。ただ、韓国での教育改革は一気呵成に進めるというところがあり、日本とは事情が違うところがあるので、一概には言えませんが、参考にすべき点の一つとしては、教員研修に力が入られたということがあると思います。

また、日本でもある時期度々報道されていましたが、英語キャンプでの体験型の英語学習というのが積極的に進められました。現在では、財政的な問題やオンライン教育の普及といったことから、廃止あるいは縮小されたところも多いようです。

荒川区では、東京グローバルゲートウェイによる英語体験が始まったばかりかと思いますが、体験することは非常に重要だと思いますので、力を入れていただきたいと思います。荒川区では、小学校第1学年から小学校英語科指導指針や小学校英語科レシンプランに基づき英語の学習が進められていますが、子どもたちが英語を使うこと、学ぶことの楽しさを大切にしてもらいたいと思います。小学校第1学年から英語について学ぶことで、英語が嫌いにならず、逆に英語に対する興味関心が高まっていくよう様々な工夫を重ねてほしいと思います。以上です。

#### ○総務企画課長

ありがとうございました。続きまして、高梨教育長お願いいたします。

#### ○高梨教育長

新型コロナウイルス感染症の影響による世界的な行動制限が緩和され、日本を訪

れる外国人観光客が以前にも増して増加し、現在荒川区内では駅前や商店街等で多くの外国語が日常的に飛び交うようになってきています。加えて、近年、マスコミ等の報道であるように、経済のグローバル化がより一層進行し、外国の経済事情が我が国の輸出構成に大きな影響をもたらすなど、産業構造や雇用環境、これからの子どもたちが生き抜く社会の環境が大きく変わろうとしています。さらに、最近では教育現場においてもグローバル化が進み、荒川区が成田空港から電車で1本という地の利もあり、区内の小中学校には、小学校で496名、中学校で199名、合計695名の外国籍の児童・生徒が日本人の子どもたちと一緒に学んでいます。こうした中、文部科学省では、外国語によるコミュニケーション能力の向上を図るため、小学校中学年からの英語教育の導入を開始しており、東京都においても生きた英語を話すことの能力向上を目指し、昨年度から高校入試にスピーキングテストが導入されています。一方、荒川区においては、先ほど教育委員の先生方からご紹介がありましたように、国に先駆けて小学校1年生から英語教育を開始しています。また、小林委員のご紹介にもありましたように平成20年度から清里にある区の施設を活用してワールドスクールを、そして平成28年度からは国際教養大学において夏季にワールドスクールを開始し、生きた英語の活用能力を育む事業を開始しています。また、英語科の授業に外国人指導員を配置し、英語検定の受験費用を全額助成するなど、子どもたちの英語を学ぶ機会を喚起することに努めています。その結果、中学校で毎年実施している学力調査では、概ね英語科では全国平均を上回る結果を得ています。一方で、学年が進行するに従い、どうしても受験英語が必要になることから、高度な語彙力や文法力などが求められ、英語を楽しみと考える子どもたちが減少する傾向が見て取れます。このため、教育委員会では、来年度からの新規事業として、区立小学校全ての6年生が東京都の設置する体験型学習施設を訪問し、生きた英語に触れ、様々なプログラムを体験学習できる機会を設けるとともに、外国人英語指導員の配置日数を大幅に増加し、全ての学年の児童が週に一度はネイティブの外国人指導員の話す英語に触れられるように機会を増やす予定としています。こうした英語教育の充実を通して荒川区の子どもたちが外国の文化や生活習慣を理解し、積極的に外国の方々とコミュニケーションを図ろうとする意欲を持ち、自分の考えや情報を的確に誰にでも表現し伝えることのできる国際人の育成を目指していきたいと考えています。未来社会の守護者である子どもたちが自信を持って世界に羽ばたく人材となるよう、今後とも学校教育の充実に努めてまいります。

○総務企画課長

ありがとうございます。それでは、最後に西川区長より、本日のまとめをお願いいたします。

○西川区長

本日は、大変貴重なご意見を賜りまして誠にありがとうございました。本日賜りました先生方の貴重なご意見を十分に踏まえ、今後も区と教育委員会が連携し、取り組んでまいりたいと存じますので、これからもご指導賜りますようよろしくお願いいたします。

○総務企画課長

ありがとうございました。以上をもちまして、令和5年度荒川区総合教育会議を閉会いたします。

—了—